

令和6年度秋季特別展

越前の禅文化 ～大本山永平寺の文化財を中心に～

はじめに

鎌倉時代の僧、道元は、宋より曹洞宗の禅を日本に伝え、越前国の深山に永平寺を開きました。永平寺とゆかりの寺院には、国宝「普勧坐禅儀」をはじめ、道元の教えを記した禅籍類や、高僧の面影を伝える絵画などがいまも受け継がれています。近年では、令和元年(2019)に永平寺の建造物19棟が国の重要文化財の指定を受けたことも記憶に新しいところです。

この特別展は、主として曹洞宗大本山永平寺が所蔵する文化財を通じて、越前の禅の歴史・文化と観覧者との「出会い」の場となることを期待し、企画したものです。

展示では、まず、道元とゆかりの高僧のすがたに親しみ、次にその教えの一端に触れ、最後に、永平寺の仏像に関する新たな視点に接していただきます。永平寺において日頃は公開されていない品を含む多様な文化財に加え、高精細映像や最新技術によるCG画像などを通して、越前に根を下ろした禅の文化について興味を持っていただければ幸いです。

1. おすがたに出会う～肖像～

曹洞宗大本山永平寺は、鎌倉時代、寛元2年(1244)に道元により開山されました(開山当初の名称は「大仏寺」。寛元4年に「永平寺」と改称)。その後、現在に至るまで800年近くの長きにわたり、道元の教え「只管打坐」(ただひたすら坐禅に徹すること)を実践する厳しい修行の寺として知られます。同時に、永平寺はその長い歴史のなかで多数の文化財を受け継いできました。

ここでは、そうした文化財のなかから、まず、永平寺開山・道元と道元ゆかりの高僧の肖像をご紹介します。

す。禅宗では、歴代の祖師や高僧の肖像画は「頂相(ちんそう・ちんぞう)」と呼ばれます。弟子が師の教えを嗣ぐこと(嗣法)の証のひとつともされ、重視されました。道元は頂相をもって嗣法とすることについては否定的だったと指摘されていますが、頂相の制作自体は行っており、生前に自ら「賛」(絵画に添える文章)を寄せた頂相も残されています(画像1)。道元の面影を今に伝える貴重な作品といえます。また、頂相は、死後にも制作されました。法要で用いられ、堂内に安置されて守られています。道元をはじめ、ゆかりの高僧の肖像を通して、その存在を感じ、親しみを持っていただければと思います。あわせて道元の所用品と伝えられる品々もご紹介します。



画像1 絹本着色 道元禅師図像 建長元年(1249)
福井県指定文化財 宝慶寺蔵

また、道元が修行の拠点として越前の地を選んだ背景として、当時、越前で広まりをみせていた白山信仰に着目します。近年の発掘成果から、道元が越前に来た当時の山岳寺院の状況や、泰澄が開いた白山への登拝口「越前馬場」として隆盛を誇った白山平泉寺について紹介します。



画像2 永平寺境内俯瞰画像(画像提供:永平寺)

2. 教えに出会う～修行とくらし～

ここでは、1章でご紹介した高僧の直筆資料が見どころです。正しい坐禅を勧める「普勸坐禅儀」(画像3 道元自筆)はもちろん、道元の教えをまとめた「正法眼蔵弘性」(永平寺二世懷奘筆写。重要文化財)のほか、道元の直筆とされる資料や、筆跡に忠実な臨書資料などをご紹介します。また、教えのなかから「正法眼蔵」の「洗面」「洗淨(トイレの作法)」、「典座教訓」の「調理」、「赴粥飯法」の「食事」といった、生活に関わる内容に着目します。第1章の肖像画のイメージを念頭に、「あの方が書いた文字か」「このよう

な教えを残されたのか」と実感していただければと思います。

さらに、永平寺における現在の修行について、映像や画像を用いて紹介します。作務(寺院内の労働全般)をはじめ、洗面、食事、トイレ、入浴、睡眠まで、生活すべての振る舞いに厳密な作法が定められている修行の日々の一端をご覧くださいと思います。

あわせて、永平寺境内の建造物(重要文化財)について、点群データ^(※)による詳細な3次元画像でご覧いただきます(1階エントランスギャラリーにて)。

※点群：3Dレーザースキャナーで得られた「位置」と「色」の情報をを持った点を集めたもの

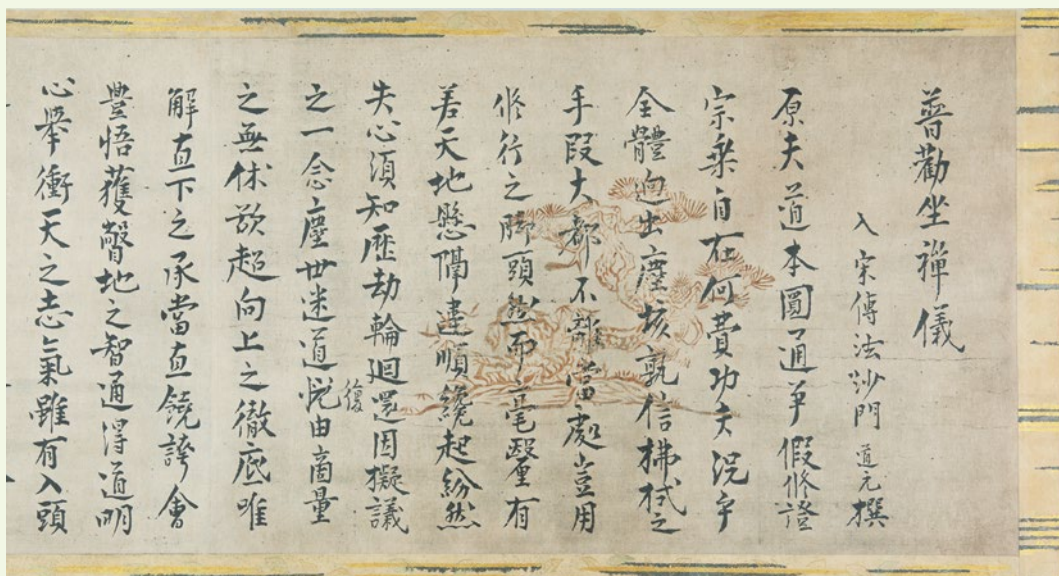


画像4 点群データ3D画像(永平寺・清水建設共同調査 測量:T&I 3D株式会社)

3. ほとけの姿

本章では、永平寺に伝わる鎌倉・南北朝時代の仏像とともに、初公開となる山門上の羅漢像を含む江戸時代の仏像をご紹介します。

まず、鎌倉時代(13世紀)の伽藍神立像の2軀は、禅



画像3 国宝 普勸坐禅儀[部分](永平寺蔵)：実物の展示は10月15日まで。17日以降は複製を展示。

宗寺院に多く伝わる伽藍神像のなかでも古い例に当たります。特に2軀のうち監齋使者像は後ろ足を浮かせて前に走り出す、躍動感ある優れた出来映えの作です。次いで、南北朝時代(14世紀)の達磨大師坐像・女神倚像・大権修利菩薩倚像〔大権修利菩薩倚像のみパネル展示〕は、曲がりの強い曲線の衣文など、院派仏師の特色を示す点が注目されます。また、頭部は江戸時代のものに替わるも、体部は南北朝時代に遡る毘沙門天立像があります。抑揚ある体つきで、側面から見て厚みのある、ずっしりと重量感のある造りが見どころです。

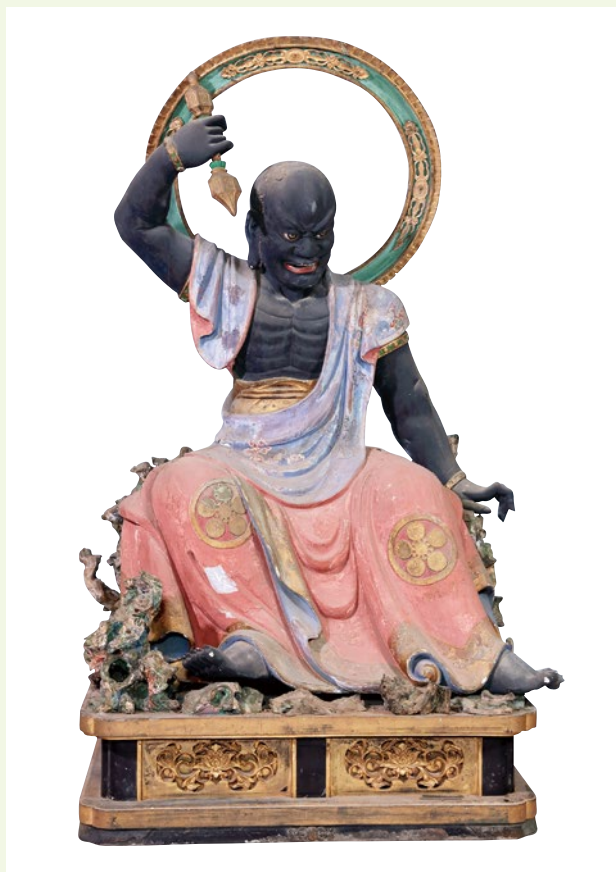
それでは今回初公開となる永平寺山門上に安置される江戸時代の仏像をみていきましょう。現在の永平寺山門は、七堂伽藍の中で最も古い寛延2年(1749)に再建されたものです。2階の羅漢堂には、宝冠釈迦如来坐像を中心に、善財童子・月蓋長者立像、迦葉・阿難立像、十六羅漢坐像、五百羅漢像が祀られています。過去の展覧会では、五百羅漢像のうち鎌倉時代の1軀が出展されましたが、他像は未調査だったため、令和5年から、山門上の仏像の全体調査を行っています。調査の結果、宝冠釈迦如来坐像、善財童子・月蓋長者立像、迦葉・阿難立像、十六羅漢像の21軀が、了慶

による延享2年(1745)頃の作であることと、五百羅漢像が康傳・康朝作を含む18世紀後半以降の作であることがわかりました。本展では、十六羅漢像から4軀と、五百羅漢像から鎌倉時代の1軀に加えて、江戸時代の15軀を展示します。

十六羅漢坐像は、角張った肩に、体部の抑揚が控えめで、奥行きがあります。耳の先の部分に膨らみをもたせて、後方に反らせる点も特徴的です。制作者の了慶は、鎌倉時代の運慶・快慶らの慶派仏師に連なる七条仏師という一派から、江戸時代に分家した系譜の仏師とみられます。今回出展する4軀のうち第四蘇頻陀尊者像は、片手を頭上に振り上げる大きな動きのポーズが違和感なく仕上げられており、了慶が優れた仏師であったことを思わせます。

五百羅漢像は、その一部に作者の名が記されていることが発見されました。これにより、五百羅漢像の多くが、七条仏師の作とわかりました。銘文からは、七条仏師30代・31代の康傳・康朝の名が確認されています。このほか、七条仏師の作とは作風を異にするが出来の良い作や、これらの像とは全く異なる在地仏師と思われる作も伝わっています。様々な仏師による多様な造形の像があり、バリエーションの豊かさを感じられるかと思います。また、表情やポーズ、服制なども各像で異なるアイデアに満ちた作です。像の背面に寄進者の名が記されたものもあり、全国各地からの寄進により造立されたこともうかがい知れます。

このように様々な時代の仏像を通して、永平寺における信仰のあり方や造像の様子を知っていただければと思います。



画像5 十六羅漢坐像 第四蘇頻陀尊者(江戸時代)(永平寺蔵)



画像6 五百羅漢坐像 康傳作(江戸時代)(永平寺蔵)

令和3年度より、福井新聞に福井県の文化施設の職員が寄稿しています。福井県立歴史博物館の学芸員は、新聞に月に1回掲載される「歴史の扉」欄で、日々の調査の中で気がついた面白いこと、楽しいことなどを執筆しています。福井新聞社より「歴史の扉」の画像提供とご協力を得て、過去に掲載された「歴史の扉」を紹介させていただきます。

令和5年(2023年)9月23日(土曜日)

令和5年(2023年)10月28日(土曜日)

今回は、福井県立歴史博物館の館蔵資料の中から、天神の像を紹介し
ます。
まずこの像をじっくり
観てみましょう。ひげを
生やした老相で、正面を
向いています。頭巾を被



福井県立歴史博物館

天神さまの物語と姿

嶺北地方では正月に、
天神の絵や像を飾る風習
があります。そのときに

り、中国風の衣を身にま
とっています。手に持っ
ているのは梅の枝です。
こうした特徴から、平
安時代の役人である菅
原道真(845～90
3年)天神の中でも、「渡
唐天神」の像だとわか
ります。



渡唐天神立像(県立歴史博物館蔵)

嶺北地方では正月に、
天神の絵や像を飾る風習
があります。そのときに

観る姿とは違っている
かと思えます。これは、
「東常天神」という黒い
装束を着て笏を持つもの
で、今回紹介する像は別
の種類の天神なのです。
渡唐天神とは、中国・
唐に渡った天神です。渡
唐天神の姿は、道真が
不思議な力で無準師範
さんという中国の高名なお坊
さんのところに行き、教

えを伝える証である衣服
(法衣)を受け取り帰っ
てきた話にもついてい
ます。道真は中国に渡っ
たことは無く、無準は道
真が亡くなって約300
年後に活躍した人です。
この話は、室町時代に禅
宗のお坊さんたちが生
み出した作り話ですが、
この話にもつく絵が盛
んに描かれ、広まってい



今回の寄稿は…
高口柚学芸員
(美術工芸)

きました。
この像は江戸時代で
す。木を彫ってつくられ
た渡唐天神像は珍し
く貴重なものです。
もう一度、この話を思
い浮かべながら、像を
観てみましょう。左肩から
斜めがけしている四角い
鞆がみえますか？こ
の鞆は、物語上の法衣
を入れているのです。
また、右足を前に出して
います。道真が海を渡っ
て中国に向かう姿を表
現しているのかもしれま
せん。明確な意味は分か
っていません。どんな思
いが込められていたの
でしょうか。
県立歴史博物館では、
こうした古くから今に伝
わる像を所蔵していま
す。今回のように、背景
を知ると、見方が広が
りますね。ぜひ昔の人が像
に込めた思いを考えなが
ら観てください。



福井県立歴史博物館

生活支えた身近な川舟

現在、私たちは移動
や物を運ぶ際、自動車
を使うことが多いです。特
に福井県では、自家乗
車の世帯当たりの普及
台数が日本一(2023
年3月時点)と、自動車
がよく使われていること
が分かります。



日本では明治時代で
始めたのは明治時代で
す。それ以前は、牛車
や馬車、カゴなどとも
に、舟が使われていまし
た。みなさんは舟とい
うと海を思い浮かべるか
も知れませんが、実は川
でも盛んに使われていま
した。

川で使われていた舟、
いわゆる「川舟」は細長
く、また舟の底が平た
い。浅い川で乗っても
安定するなどの特徴が
あります。明治23年(1

890年)の福井県では、
少なくとも千を超える数
の川舟があったよう
です。川舟は、人や物の移
動に加え、鮎釣りなどで
身近に使われ、生活を支
えたといえます。

しかし、現在の福井県
では、その姿を見るこ
とはほとんどできませ
ん。これは、明治時代後
半から、鉄道や自動車
が広まってきたことに加
えて、川を国や県、市町
が管理するようになり、
川舟を使うことに許可が
必要になったためであ
ります。また水難事故な
ど、川は危険なので不
意に近づいてはいけな



今回の寄稿は…
伊藤大生学芸員
(歴史地理学)

場所というイメージが
あったことも一因でし
ょう。
川と人々の関係が薄
まったことで、川舟は姿
を消していき、平成15
(2003年)の九頭竜
川では、その数は10艘
程度にまで減っていま
した。
川舟は基本的に木造な
ので、自然に朽ちてな
かったり、燃やされて処
分されたといえます。か
くだい。

つては身近にあり、生活
を支えた川舟は、今や大
変貴重な資料といえま
す。
現在、福井県立歴史博
物館で開催中の特別展
「描かれた川と人々」で
は、なんと九頭竜川で使
われていた本物の川舟を
展示しています。しかも
この川舟には、実際に乗
ることもできます。ぜひ
観察したり、乗ってみ
てください。

令和5年(2023年)11月18日(土曜日)



福井県の海の幸といえ
ばカニやフグが有名です
が、塩も海の幸だった
といったら意外でしょ
うか。実は若狭湾沿岸
は、奈良時代に塩作り
を行っていた遺跡が多
数見つかり、塩は、大
消費地です。塩は、大

若狭の塩作り 都支える



平城宮跡から見つかった荷札(奈良文化財研究所蔵)

費地である奈良の都にも
送られました。
写真は、平城宮跡(奈
良市)の発掘調査で見
つかった、若狭国からの
税に付けられた荷札で
す。表裏両面に文字が
あります。「神龜四年」
は西暦727年です。当
時は国一郡一郷一里とい
う行政区画でした。現在

でいうと、国は県、郡は
市や町、郷や里はさらに
小さい地域に相当し、「若
狭国遠敷郡玉置郷田井
里」は、現在の福井県若
狭町玉置付近を指しま
す。「三次君国依」が
税を納めた人物です。
調は、地域の産物を納
める税で、若狭国からは
一人当たり塩3斗を納め

ていました。3斗は現在
の約22kgです。「閏月」
は旧暦において季節と
暦のズレを調整するた
めに数年に一度加えられ
る月で、神龜4年は9月
の次が閏9月でした。
若狭国の場合、調を納
める期限は10月末と定め
られていて、閏9月7
日(現在の10月下旬)ころ

は塩作りのピークでし
た。当時は、土器に入れ
た海水を煮詰めて塩を生
産していたので、海水汲
みや煮沸などは、さぞ過
酷な作業だったでしょ
う。
若狭町玉置は、当時の
海岸線から数キロ離れた
内陸部に位置します。「三
次君国依」は、塩作り
のため、海岸の作業場ま
で出かけたのか。それと
も、地元で燃料になる薪
ではいかがでしょうか。



今回の寄稿は…
酒井健治さん
(文化財調査員・歴史学)

令和5年(2023年)12月23日(土曜日)



「解体新書」刊行に
関わった杉田玄白と中川
淳庵は、若狭小浜藩の
医者でした。
その中川淳庵は、た
ばこ好きだったようで
愛用していたキセル(た
ばこを吸う道具)の図が
「蕪録」(作者は杉田玄

発禁めげず たばこの本



白の弟子で、蘭学を發展
させた仙台藩の大槻玄
沢という本に載ってい
ます。
この図によれば、淳
庵のキセルは、今のドイ
ツやオーストリア辺りの
品で、全て木製です。先
端のたばこの葉を盛る部

分には、植物の模様の
彫刻があって透明な漆
を何度も塗り重ねてあ
り、管の部分は黒い木で
吸い口部分と本体部分と
で分解可能のようです。
このヨーロッパのおしゃ
れなキセルは、淳庵の
自慢の逸品だったこと

しょう。
さて、この「蕪録」に
は淳庵のキセルの他に
も、オランダ、ロシア、
中国、ベトナムなどの喫
煙具、たばこの歴史、効
能、植生、産地、毒性、
たばこを題材にした漢詩
など、たばこに関するあ
りとあらゆる情報がまと
められています。
まるで、たばこをデー
マとした図録のような本
なのですが、じつは幕府
の事前検閲で公に出版
を止められているので

す。出版不許可とした幕
府の言い分は、「自分た
ちが知らないような情報
を一般に広めるな」とい
う、なんともやるせない
ものでした。
みなさんが作者の玄沢
だったかどうかは、
出版をあきらめるか、幕
府から指摘を受けた部分
を削除して、再度出版審
査を受けるか。
玄沢の選択はどちらで
もありませんでした。開



今回の寄稿は…
有馬香織学芸員
(中世史・歴史資料)

き直って、問題の箇所を
割愛するところさらに
情報を増やして、私家版
で刊行したのです。そし
て、これが江戸時代のた
ばこについての最高の書
籍となりました。
権力がいくら人々の
知的好奇心を抑え込もう
としても、規制しようと
してもそんなことは無駄
だったわけです。江戸の
蘭学者たちの精神の自由
を感じます。

令和6年(2024年)1月27日(土曜日)



福井県立歴史博物館

令和6年の干支は「辰」ですね。そこで、今回は龍が活躍する絵馬「写真①」を取り上げます。この絵馬の作者は、夢楽洞万司という人物です。万司は江戸時代後期から福井城下で絵馬を制作・販売して人気を集め、

見て楽しい龍の絵馬



①「大龍」図絵
馬(復元複製)



②「龍王」図絵
馬(復元複製)

代替わりしながら大正時代まで絵馬を作り続けた。この絵馬は、二代目万司の作品を当時の絵具と技法で描きなおしたもの

(復元複製)です。幅約180cmの大型品で「大龍」という物語のクライマックスシーンが描かれています。藤原鎌足が龍王に奪われた宝

玉を、海女が取り返しています。逃げる海女、追う龍と龍宮の軍勢、船で海女を助けに来る鎌足たちを画面いっぱい、かつ遠近感をもって描かれています。じつは、この絵馬には元ネタがあります。それが、錦絵「浮城和国景跡龍宮玉取之図」(歌川豊春画)「写真②」です。比べてみると、建物や人物の配置がよく似ています。万司はこの錦絵(またはこの絵を真似た作品)を参考にして絵馬を描いたと考えられます。しかし、万司はただ丸



瓜生由起
総括学芸員
(中近世石造物)

今回の寄稿は…



©福井新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和6年(2024年)2月24日(土曜日)



福井県立歴史博物館

みなさんは結城秀康をご存じでしょうか。秀康は福井藩の祖で、現在の福井市街地の原形を築いたとして地元では有名です。しかし、全国的な知名度は高くありません。徳川家康の次男ですが、冷遇されて他家へ養子に

結城秀康 翻弄された生涯



雨田光平作
結城秀康坐像(福井県立歴史博物館蔵)

出され、弟の秀忠に徳川家と江戸幕府の將軍を継がれてしまったというように、不運な人生を送った地味な存在と捉えられがちです。しかし、史料を詳細に検討していくと、秀康のさまざまな面が見えてきます。秀康は母親の身分が低かったため、あるいは双子であったため、家康から冷遇され、他家へ養子に出されたと言われることがあります。

一方、前田育徳会所蔵文書によれば、天正12年(1584年)豊臣秀吉と家康が争った小牧・長久手の戦いの和睦交渉の際、秀吉は11歳の秀康を「惣領子」すなわち、徳川家を継ぐ子と表現し

人質(養子の体裁)としたことが分かります。家康の長男が死亡していたこの段階で、次男の秀康こそ徳川家を継ぐ子、つまり最も価値の高い人質と認識し、家康との和睦を承諾したわけですね。秀康の豊臣家への養子は、家康の内心はどうあれ、戦争の講和条件をどうするかという政治的交渉のなかで決まった点を見逃してはいけません。秀康の豊臣家から結城家への養子も、あくまで政治的駆け引きのなかで決まったものです。秀康は自身ではどうしようも



大河内勇介学芸員
(日本中世史)

今回の寄稿は…



©福井新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和6年(2024年)3月23日(土曜日)



現在、県立歴史博物館では「企画展 福井県立歴史博物館 珠玉の文化財」展を開催しています。この企画展では、北陸新幹線の福井・敦賀

学芸員らの「推し」見て



「企画展 福井県立歴史博物館 珠玉の文化財」のポスター

開業に合わせ「福井の歴史の宝箱」である当館で働く学芸員全員と、館長・副館長が推す文化財を展示しており、県内外からお越しになる方々にご覧いただき、福井の歴史をより深く知っていただく研究している者など、専門分野は全員違います。ちなみに、私は日本の陶磁器の歴史を美術的な観点から研究している、特に越前焼を専門にしています。

県立歴史博物館には福井県の歴史と文化を知るために必要な資料が数多くありますが、スペースや展示構成、保存上の問題などの理由で普段は展示が難しい資料もあります。例えば、私が推す資料は室町時代に作られた越前焼の大甕です。とてもいい資料なのですが、高さが約1尺、直径が約90センチもあるため普段は展



今回の寄稿は…
一瀬諒学芸員
(美術史学)

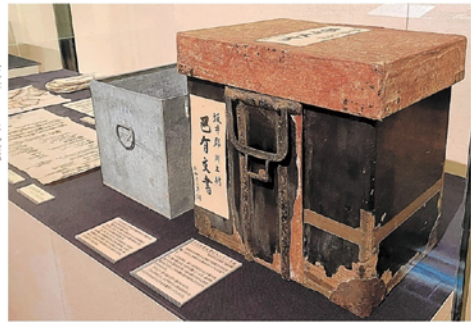
示が難しく、今回初公開になります。実は、この大甕には大きさ以外にも秘密が隠されているのですが、それは会場での楽しみにしておきましょう。今回の企画展は特定のテーマで深掘りする展示とは違い、刀剣類や屏風・陶磁器・古文書・木像などバリエーション豊かな推しの資料がめじろ押しです。展示資料の選

令和6年(2024年)4月27日(土曜日)



現在、県立歴史博物館では企画展「珠玉の文化財」展を開催しています。各学芸員や館長・副館長の「推しの逸品」を展示して、その中でも越前焼の大甕が前回の「歴史の扉」で紹介されました。

今回は私の「推しの逸品」を紹介します。それは「古文書が入っていた箱」です。「古文書」とは簡単にいうと「昔に書かれた書類」のことで、これを読むことで昔の出来事や状況などさまざまな歴史を知ることが出来ます。古文書は、国や県、市町で保管されているものと思うかもしれませんが、実は地区や個人宅に残っているものもあります。とくに、地区や個人



展示中の古文書が入っていた箱
「県立歴史博物館」

歴史を伝える「宝箱」

宅に残っている古文書は、地域のかつての人口や環境、出来事などといった地域の歴史を知るうえで最高の素材のひとつでもあり、いまでも木やブリキの箱などに入られて残っていることが多いです。こうした古文書が入っていた箱は、100年以上の時や災害を越え、古文書を現在に伝えてきたことを考えると、まさに歴史の「宝箱」であり、珠玉の文化財とも呼べるものだと思います。もちろん、そうした箱を残してきた地区や個人の苦労や偉大さも忘れることはできません。



今回の寄稿は…
伊藤大生学芸員
(歴史地理学)

さて、開催中の企画展では、古文書が入っていた箱を展示しています。それは、これまで箱が注目されたり、展示されたりする機会がめったになかったことも理由ですが、こうした箱がいまでも残っている一方で、その存在が忘れ去られていることも多く、まだまだ調べられていないからです。いわば誰にも知られていない、地域の唯一無二の歴史が、みなさんの館までご連絡ください。もし見つかりましたら、大切に末永く保管していただくか、お近くの文化施設や県立歴史博物館までご連絡ください。

3月

- 9日(土)
企画展「福井県立歴史博物館 珠玉の文化財」スタート(5月6日まで)
- 16日(土)
北陸新幹線 金沢・敦賀間開業
ふくい歴博講座「地名『九頭竜川』と『黒竜川』」

4月

- 4日(木)・5日(金)
永平寺文化財調査
- 12日(金)
坂井市龍翔博物館 来館(資料借用)
- 20日(土)
ふくい歴博講座「古代の史料からみた越前・若狭の産物」
- 22日(月)
福井大学留学生 団体見学
- 26日(金)
多言語音声ガイド スタート
武生南小学校3年 団体見学

5月

- 2日(木)
加賀市分校小学校3、4年生 団体見学
- 5日(日祝)
ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験! 昭和のあそび～春編～」
- 8日(水)
岐阜市歴史博物館 来館(資料調査)
- 9日(木)
写真展「結城秀康ゆかりの史跡」スタート(9月16日まで)
永平寺文化財調査
- 12日(日)
愛知県立大学 団体見学
- 15日(水)
府中市美術館 来館(資料返却)
- 17日(金)
国高小学校3年生 団体見学
- 22日(水)
館内メンテナンスのため休館(5月31日まで)

6月

- 2日(日)
永平寺文化財調査・撮影
- 3日(月)
宝慶寺文化財調査・撮影
- 4日(火)
北信越博物館協議会総会
明新小学校4年生 団体見学
- 5日(水)
生涯学習・文化財課 来館(資料調査) ※6月6日まで
- 6日(木)
東郷小学校6年生 団体見学
- 13日(木)
坂井市龍翔博物館 来館(資料返却)
- 20日(木)
富山大学学生 来館(資料調査)
- 28日(金)
福井県博物館協議会総会

7月

- 2日(火)
こども歴史文化館 来館(資料借用)
- 5日(金)
一乗谷朝倉氏遺跡博物館 来館(資料借用)
- 10日(水)
生涯学習・文化財課 来館(資料調査) ※7月12日まで
金沢美術工芸大学 来館(オープン収蔵庫撮影)
- 11日(木)
昭和のくらし模様替え(夏)
- 20日(土)
特別展「天下人の子」 結城秀康と一族・家臣」開会式・内覧会・オープン(8月25日まで)
- 27日(土)
特別展「天下人の子」 結城秀康と一族・家臣」展示解説

8月

- 3日(土)
特別展「天下人の子」 結城秀康と一族・家臣」記念トークイベント「結城秀康を再考する」
- 16日(金)
博物館実習(8月20日まで)
- 17日(土)
特別展「天下人の子」 結城秀康と一族・家臣」展示解説
- 18日(日)
ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験! 昭和のあそび～夏編～」



ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験! 昭和のあそび～春編～」
(令和6年5月5日)

秋季特別展

「越前の禅文化」

一大本山永平寺の文化財を中心にー

開催期間: 令和6年9月21日(土)～11月4日(月祝)

※会期中休館日: 10月16日(水)

観覧料: 一般400円 大学・高校生300円

小中学生・70歳以上の方200円

※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館ください
ますようお願い申し上げます。